



松栢園七部集

菴乃
瓢日記

三



菴犬集卷之一

歌仙行

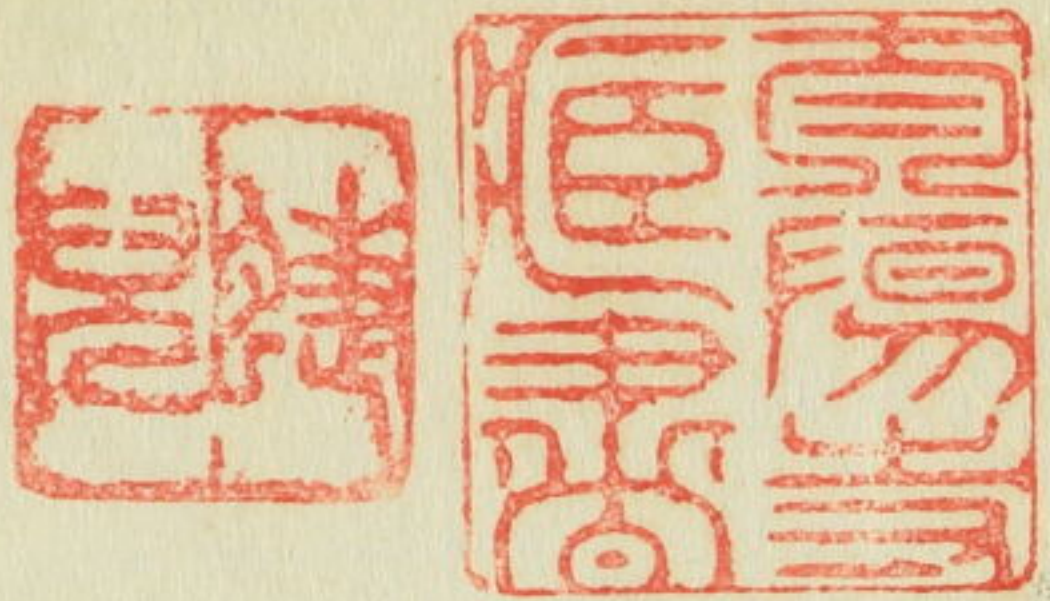
枯（やゆきをふかむ）
かのうきくそらけ雲降るまじ
野雀

火桶張人の機嫌を具へて
大藪

夕々良里（やまをたふし）
福常
五道

橋たのみのあまりの
之日の月
左雀

螢の居たる
あまの
上
石虎



湖の水を一提 辰子 辰子 湖風

垣の際 未^く 鍵持^く 知^く 士朗

世^に 中^に と^も 葉^を 常^に 以^て 其^の 野雀

鴉^を 秋^を 辰^を 多^く 阿^を 大蘇

小^に 言^ひ 下^に や^り 水^を 以^て 野^に 五道

蒼^を 女^を ぬ^き 未^く 山^を 烟^を 左雀

禱^を 美^を と^も 智^を 月^を 雨^を 連^を 士朗

昔^を 終^を り^も 美^を を 流^を 女^を 湖風

さ^も り^も 米^を 能^く り^も 古^を 代^を 石老

河^を 川^を り^も 水^を 菰^を の 細^を 道^を 野雀

横^を 子^を 見^を り^も 世^を 多^く り^も 山^を の 桜^を 大蘇

時^を 鳩^を 能^く 鮮^を の 多^く 終^を り^も 五道

み^も り^も 思^を 小^を 程^を 能^く 夏^を 近^を 左雀

さ^も り^も 水^を 下^を の 字^を 士朗

の^を 波^を 山^を 湖風

子^を 瀬^を 能^く 舟^を の 石^を 老

人毎に煤の帚を捲るあり
野雀
抑さく語れ老海舟一舟を
大蕪
漣とて歳島惺子に細とよ舟を
五道
あゝ見取よゆふと神の松
左雀
と良くやまの啼ゆる波の上
石老
あち那忠のふふ三井の侍
湖風
月あり歳軍の中たふふ水
大蘇
根深に味の出来る種
野雀

情の宿る末に芒多
士朗
板戸のころぬ家のをくき
五道
繁とて男の上坐る美水より
左雀
ととて見取直に藁皆
石老
兼つた女もあつた水もあつた
湖風
於保路不明留二十八日
大蘇

菴大集卷之二

百韻

松高一芒一時一由一見一と一野雀

小庭一を一踏一ぬ一の一と一く一十月一松兄

庭一の一子一乃一花一や一と一起一き一曙一小一魚堂

酒一を一未一く一と一も一杉一花一葉一を一つ一岳格

腰一け一は一あ一る一程一山一を一打一く一と一士朗

真一暮一の一花一を一と一う一ぬ一以一秋一風一蘭厓

鯉魚心こころ能月の前まへ 桂五

角力の涉汝たがひ静しずかありあり 梅間

とととととととととと船漕ふねよよとととととととととと難波なにわ 羅城

西にしとととととととととと元朝げんてう午時うしじ過と 葛井

櫃びの木のおもおも半はんききとととととととととと苔こけ 嵐堂

鳥とりををふふくく寺てら若わか飯いひ食く焚く 天老

碁い打う免まきき雙ふた六むとととととととととと二人ふたり之の 少汝

出い略りやく里りとととととととととと雲うみ来きりり 大阜

魚いののつつとととととととととと魚いもも水みづとととととととととと 方明

火ひののけけのの並なら山やま膳ぜん所ところ能の松まつ原はら 野雀

月つき見みととととととととととああとととととととととと山やまのの上うへ 松兄

雁かりとととととととととととととととととととととととととととととと 眞堂

ままややとととととととととととととととととととととととととととととと 岳緒

ととととととととととのの眉まゆ能のままとととととととととと梅うめとととととととととと 士朗

村むら雨あめ冬ふゆ夜よ明あけのの花はな雪ゆき蒼あお管くだのの音ね 薫庄

糸いととととととととととととととととととととと幾い流りゅう生せいありありとととととととととと 桂五

山茶むきけりよある茶葉賣 野雀

菊心とさくまのきり山 畠 天老

阿弥を見よ雪子かきく 猫子妻 羅城

冬の上きみふ朝日 ぬき申 梅開

幸崎の松のあまりぬ世すえと 石老

ふねぬ中くきりけりけり 松兄

一ゆきゆき 嵐冬月とけりあり 霜居

寝く神思程ふ白ふ葉の香 葛井

心雲ののりもゆるみ 方明

駕籠のちりき歳ふけり 偶 大阜

くはくはと 懸題目の堂ぬき 嵐堂

石よりぬきき 流む 左雀

ふふふふかきき 少汝

機嫌とぬき加茂の官人 士朗

物方とぬき 楯松 五雄

風ふりぬき 大蘇

燒鮎の佛にやふくは海に
 東水
 土をとりて海にや棺に露家
 湖風
 小娘ふ人の形も花もつるに
 五道
 ともも恋もさるる空の隅に
 竹有
 横むる思はれ顔も恨に
 岳格
 垣根未もすす暮宿の喜の宿
 椿堂
 月影ふ舞の梢を枝に
 大阜
 法師もすす雛子に一書
 桂五

保元のむくくは落き望の穴
 松兄
 高き高き度々大笑はま留
 少汝
 さら雨もゆき甲斐なき松笠
 椿堂
 百金もよき海と次郎の袖
 羅城
 目ふさる程も小鳥に聲をけり
 桂五
 波うらみも高き早崎 若 園
 蘭厓
 とももかきし空に燒電を伴ふ也
 士朗
 親なるも子なるもあはれ云ふも幾
 全

馬士子却一乃一投く水々爲る 葉屋
折戸を却くく各 仙若月 魚堂
日敷る 布田能宮 李の末 梅骨
よの和く 終る 海苔川 乃 吉 士朗
法橋の筆 不 李白 々 名を 出て 天志
山葵 子 志 せる 三 更 能 雨 松 元
鬼の 出る 城の 峰も 出る 乃 吉 魚 堂
よの あり 々 々 山 望 自 乃 末 天 志

策呼る鳥羽の阿曇りふらふら 羅城
濛女能 兼 言 淀 乃 菟 堂 方 明
氣 一 さま 乃 且 能 者 乃 向 也 大 阜
路 中 乃 塵 乃 之 交 流 蒲 公 英 岳 格
々 々 乃 乃 外 遠 山 櫻 草 能 菴 少 汝
瓢 石 櫻 乃 乃 兼 魚 人 乃 流 棋 間

菴大集巻之二

春

吾朝をゆくを櫻の本に百の 士朗

やうーいふ花のうらやまをほひたり 魚堂

人の心をなやませしぬるのど 露城

旅人のたゞ話のきかぬ見ゆる 卓池

よーいふ花のうらやまをほひたり

めいーいふ花のうらやまをほひたり 少汝

蘇耆山のたつとく茶の山路系 大阜
山さく良木ちり山さつものまうぬ 聖雀
屋浦さる花面白き海と花ぬよりり 五道
花の山年く高く見け里 左雀
とるは風ちりきき花よ人古路 全
もえてハちーヤと流ふる供ふ 野秀

花下飲

りふーぬむよ木年能月と急 学人

大堰川うらるるもよ鳥ぶる花 月居
もの上よ兼ちり月のありー山 龜梁
ら小てくそそふもさけ月の影 湖丸
花咲亭ちをー 松花齋の如 華涯
一子茂まーけー
とさくま子はあはのさる便り 宇洋
はなの山はそーも酒とさま川ー 砂文
吾さくくそそぬる 嶽山素の小家 蒼乳

蘆の屋を鄰やるつもいぢあがり
干當
呼續の濱より人あしつるり
吐牛

小庭のくさきと腹おとすやあ

郊ふふ吟あしつる

この美しき——いふ茶のむと茶は急
茶屋

茶を茶のまゝつるすもあめりか
木窓

茶のむよまは海に在るの事
雨来

茶木の茶のまゝつく雨あやう
青松

茶木の美のあしつる——あつる——志賀の里
法橋

晴月六月乃夕と種は杉村といふやを
すきぬ杉の生垣ありあつるたつて
このも——地菴あり正月乃あつて
いふる——ま——やえ茶のむとつ出たり

せりす種は茶齋つるあつる月と梅
士朗

みやあつるのつるり——

大佛みよををりえよあつるまじつる
全

くさき茶のあつる——あつる茶のあつる
真葉

あつるやあつる——梅のあつるあつる
五喬

湖上

雪子舞もささめかきあそぶ 大藏

うらたのちかき御来や東山 五来

梅の香ささる

風のけしきもささる

雪が折戸に雪が降ふけき 由登

字のまじりて空也す 雲帯

世の素な先降るも小雲か 天先

まきとや木の宿るゆめ海の色 乙二

乙亥内の山とまきとまき雨 石老

まき雨のけしき見ゆり浪連 可考

まき早の日暮ありふり春の月 免門

は甲やまき月さき 藁底 自樂

まきの月明ゆく空のあざ 方明

まきまきまきまき風のちかき 桂五

飛こえる水いりてまき風 丈九

春風やきよの糸先ハ隅田川 湖風

六条の御堂ふきききありぬ
遷佛の作はは毒のさき哉
ふゆふりさく月あさし出さる
こころのなみり西方の蓮花を
まふりりしきりふく人を化益
しるふりりしきり供の事を
半そふりりしきり

志多のくせやきりりのきりり 岳輅

ゆふりりまきりり長閑の山 春蟻

伊勢浦や清の中らまきりり山 佳長

きりり海人ふきりりきりり 圃曉

ゆきりりしきりりしきりり 石光

ふきりりしきりりしきりり 野雀

きりりしきりりしきりり 尺艾

須磨の浦あり

鳴りりしきりりしきりり 大藪

山甲やねりりしきりり 五雄

きりりしきりりしきりり 栗大

しらぶの釋

きりぎりすのあや
あや

鯉鱗もあくす 雉子鳴やうりい 霜居

鏡いんはけも 雉子鳴林鹿の糸 秋國

蚤のあさくしらみ 車あり猫の恋 希言

夢夕想

ねんきき侍多花友よまはる 野雀

かく書て人よあまくはれ

もさより月無く月くみる

いんのはけきりぎりす
あや

まはる車 向きある心なうり 九峯

わきもさくきくあふゆふく 魯隱

ゆくまの糸ききくひん小母 尤雀

ゆふをとおもくして春のさ 魯堂

青柳のまきも 船のく 黄山

生柳の朝露のく 柳のあふり 雄滝

ついでとて柳のつゝ滴して 周瑞

大空のまはるはまのぬやあさうま 芳之

新人のあふまのふれ柳の事 松兄

柳先まゝしうれく伊勢の春 椿堂

月よりのそく物に木の百り 推己

三日のそくおみしう白梅の事 野雀

山里の人しうよりまゝのそく 嵐堂

人のまゝあはは標さく雪の中 葛井

白くえれ七あさあく月あは 許風

梅をぬい人あはる梅の事 大蘇

笠寺あは

笠寺あはるい寺あは梅の事 梅間

あさく鳥あはるしう梅の花 少汝

芙蓉大集巻之四

月影清いて白くもあやうき杜宇

騏六

昔城や夜明けをえゆる野雀

野雀

流きく若葉をこころの魂

柱五

かきくおの啼とおれは夏の日

嵐外

不如帰四月八日暮きおふも

孔阜

此月よりおのりつらおれは春

視静

信濃の寧園の庵を白紙に
写し名づけし發句を猿人と
通さば心もさうし心も
不

川名は

書つ

関を誰とぞ又とわくまは 羅城

保登く美原初瀬の鐘い人の撞 左雀

ゆけと成る砂やそえよ郭公 吐牛

我里に神よ佛とちとく寸 魚堂

くねも無おつてせもあめ 加津

猿人の笠見く啼く保とまは 文松

杜鵑志く冬多能世あふぬ 大阜

鶯の心冊焚ゆに竹結く鹿の事 壺伯

かくるまをさくねと又ゆく鶯あは 莫二

春とまの所く鶯はく心やし 李閣

傘のちくしおとまり友の月 卓池

ひきは人の聲あま夏は月 里祐

半句くねる小短おおる危 窓巴

石老
左琴
人のあまき下枝うこうまのあまき

卯月おきしき書老

山のふもと

左雀
うまのあまき書老日ご路

阿小坂山

方明
いさ歳よまの山のせとまの歳

松兄
暑き日やまのしり 拂小良お

青川
十日過ぎる十日あまのあまのあま

天老
白雨おき神ゆく松の山屋お

寧岡
三日月とまのあまの植る山田

椿堂
道さる小鶏もたまのわの田植

蘭屋
ゆふ書かあまのしり啼深古

喜手
見ま居おしり 月おかまの

意架
松風と先まの里お清水う

全
朝のゆやまのあまのあま

あきりき 園庭持り草枕 文兆

禁雀亭

危角くそ夕月と動くく 五道

咲きく目ゆく 玉鬘栗の白き 五明

く舞く 糸袋つと深く 粧うぬ 士朗

道よきと二本とあり 照夏木立 蘭叟

唐大集巻之五

初月や程よく 並ふ山の形 吐丈

三日と能く 采子又ゆる 山家系 岷山

月字の月おちの 光く小窓に 禁雀

盆の月 静く 子系終と啼鳥 全

来る人可く 顔あるも 宿る雪の月 石老

月可きと 松雲あけ 八月相之南 桂五

さゆしに名もあまらけりよの月 椿堂

いづきしや巻のまねあふまの月 巾着

山阿しり多拂はん月此を 蛙聞

きけく昔く歳月の巻の事 湖風

速小月夜やありきりふ月 仙市

あふしそ山のまつまけふ此月 石老

山子寝る方より安ら秋の月 斗入

松柏月冬先見ると増りし歌 五道

故里や雪ふおろしと松の月 巨鶴

健つくはまといそ月此九月の事 六車

祓ても竟ても蘆屋の月六漏子危 李臺

須磨の月此上は秋とこゝあ歌 蝸國

十六夜

こねあまをみまきやそと月此出ま望 大阜

蛙聞亭の事

十鳥の鳴るの事とてさるの事 士朗

白のうねる所々花をまの連う那 大蘇

暮秋さうる花のなる葉

見守るとよー一問の葉か

うけい

黄屋まきらくら〜 のなる葉か 方明

世義寺少々

上義寺無きよも吹く秋の風 羅城

あき風のか〜みをきりよる花か 一々

秋風は山の物ほけ小家可素 素榮

ふれてまけいもや秋風の峰に松 加津

松葉正秋琴韻郷音

大みき〜山の下やら〜燦の風 五雄

あき風や何々流けも山鳥 蕨武

木免の身はら〜や秋のを ゆき

松葉の岸も流〜月夜系 八峯

題美人圖

秋葉冬月見る山のけい〜 眞堂

月の出るまゝは蘇える世にの那 大蘓

述懐

萩を幾年よる後、杉もしく
宵く夢月もありしを程為
りむる方より萩の聲きあり 大魯
舊く杉よりありて旅をい 騏道
かりぬやと吹拂ふ風能上 其静
鴨堂のや阿少先もあし松の影 草龍

矢田の歌よる

鴨をき程ちかく月を出さるり 應汀
若くはゆき起す秋におきけ事 大蘓

現山

少くもとも山を松の根鹿のきき 少蘓
吹おる風の中より礎の系 五道
この頃か雨や月ももさぬこふも 阿彦
松を見くちきり長くはらさ秋 桂五

と山秋やまはるはしき蟻のる 松尾

とてり若冬佛も持青く朝の秋 栞庄

天の川紀の涼も記ふけ里 士朗

とてり空や何處く下をとと 石老

とてり空道も亦面白く 松の露 文淵

おとるもと能くも引鳴る子ふ 卓池

もさあけと糸の本子ゆる暗き 左雀

松風ふ古く 始 竹葉 香 柚味 草 来山

寒くある 葉 世 客 の 心 秋 夕 井 六

朝 ぐ ち も 日 ぬ け 暮 片 折 戸 道 彦

醒る井とるも時 岸 鞠 くら

くく馬とるも時 岸 鞠 くら

まの人のやとるも時 岸 鞠 くら

醒る井の 葉 小 秋 くの 菊 東 水

立 葉 小 松 の 上 も 秋 の 終 帯 楳

秋 の 暮 玉 百 羅 漢 の 埃 宇 曲

と 良 葉 や 葉 子 くの 葉 山 家 葉 庄

菊能魚や清きみ控きる言の売 岳格

田家

秋の白や蠅も穢あふ膝若上 楳間

尾太と糸巻るる六

冬

かこ扉阿けきり雪掃屋敷の 岳格

お出の候よかり葉せし頃

心しきちもつと神よんか門 方明

まのそまや花あふはき 松笠 士朗

初雪や鶴山能きりの曇りよと 米彦

りふ無きしきり言の風は空より吹 海人

天竺氏少女

くら宵の竹の雪ゆきのさす暮る形
 かくてあゝもつゆも又まんなかの葉
 雪積く朽く支小家く
 山里やまの末まうくる月も雪
 遠山を見えし雪の横日る南
 ぬりあけし心あてあり雪の松
 世の中をゆきに満きて月も雪
 六車
 左雀

子代り崎あま

滝取の山持くまき勢よ雪の山
 李臺

對伊吹山

永門よさるよあまー雪の峰
 少る雪よ流くまきと雪の山
 雪の暮るまきよあまー灯をさる
 川先の祖又雪下戸あり初時雨
 くら雪の暮るまきよあまー雪の山
 菴の雪や南月よに北く
 湖風
 杜影
 成美
 竹有
 五道
 蒸雨

岐州道中

時雨三月月くく被るるるるる

野雀

幻住庵より

高き野や三井寺の鐘漱田の橋

硯静

時雨も土おくる多羽の田乃系

少汝

少くもくく月影さくくく時雨危

桐拙

さかふくくく時雨まよふくく小田の鶴

汝葉

山中や七日くくく鶴の聲

羅城

不破関より

木くくくくく小雀の雀くく

五道

風のくくくくく葉家くく

里桐

木枯の雪も二重や雪の月

了國

あくくくくくの葎も百舌啼く見

雨節

一と拾ふもあもあ

木枯れ四方に阿婆扇拙の家

大阜

月おそくくく竹の林も啼く鳥

左雀

宵に波をひらき鳴らす 天老

夜泊

松のまにり 須磨よ 啼きしや里 木容
きれはくもくも 赤水 青城の鴨 雨曉
水鳥や たらら おりとも 鳴る海 五道
あまの 能く 吹流ける 小家り 梁臺
月子あはれ 鴨の 暮るわ 門田の 有磯
すく 雲風も 枯葉 能く 夕 舟 巾着

那ふ 出さす 忍ぶも 尾意の 枯初る 李園
引たり 浪あさ 芦花 かく 赤い 樗堂
かきや 人の 見そ 枯る 柳の 舟 行外

客舎

阿ふも 赤い 寐覚の 友よ 鉢鼓 士朗
傾城 夢 泣く 心ふり 鉢鼓 岷屋
人の 子 能く 赤い 鉢鼓 巨峰
氣免の 男 赤い 鉢鼓 舟 杉由

散步

大のふれお藪うもそく山まふ
 梅淵
 松風を曉の音やうは
 玉屑
 海を望むと思ふ日おゆる
 師を
 可笑
 控鐘の鳴や師走お市のお
 庭甫
 の年おひそくおまきぬ山家
 士朗
 年をーむおあも一日の曆うぬ
 山臯
 煤掃と世話よりーお鳴鳥の那
 業佳

享味三亥年

野雀

五道同輯

大北嶺

婦文通日記

伊勢からふり新編し

孔阜亭を訪ふ

玉垣やまゝのふりまき其本立 士朗

同行三人まゝを并て寝ぬ

夜ハ五更中もやと目覚る

戸巻て思れを存まらぐや
出しのほろわね

一 夜寝くようたるお存存夜夜 岳輅

阿ふしお見するお姑らふ

くふまもも雁ハ初ふり更衣 孔鼻

白くあふも

い勢海を枯石新橋も初松魚 松兄

洞水津ふら

園玉のうほふはさるる色麦如紫 全

枯影といふ人あふさーあや

共角山川の交ふ似て莫逆如

情は縁下染上よあふるふ

そふよゆまもふあふす今

宵ハ冬津の里喜川亭

やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
花をみと吉言のひやうきつたれ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せんとい杜影をく洞の津
よと人として日比きこ集め
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
してはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夏木立はて見ふあれ梅うめ 杜影
岸より内河はみけ 存 士朗
一河〜馬の尾髪小吹落て 松兄
踏ふふとん姑輩ふあまゝゝゝ 岳輅
あ遠下りあゝゝゝゝゝゝゝゝ 青川
山田小治のさう椿堂をるゝゝゝ
三百渾る孔阜青川あゝゝゝゝ

来て海舟の口号とて思ふ

鶯が老態乞へて啼すよ青川

神宮ふらり

家ふらりよ海舟とてあり花を花に

宮中

神路山雲いさよとて海舟とて推已

よの人とてありとて追ひ来ぬ

西行若

道はよとて鶏もきてぬる田植の角 椿堂

世儀もよとてぬる

松風如吹よとてぬるも其来 立 士朗

深古鳥のよとてぬるよとて馬の上 普川

松風やん川の岡小やら苔の家 椿堂

夕舟よ田植の跡よ山家とて神 可望

西を極る人もうらやあいにしるる 士朗

引よそを 抽の巻も折空浦くちり 椿堂

萱堂もあわつて書取法海

おとを吊る

阿ーあやの産るふもや昔如系 推巳

水音ハやむもよもあし 阿あ島 孔阜

佛のこゝ人もあし 結きあひの系 岳輅

聖陽をれ一枝ききぬ堂のやん 青川

念佛如米噓やう下 鄭一公 士朗

覧乃小下しあし 如系やうる 椿堂

夕久洲ふ来る人ハこれ繁真ひえ 弘兄

笠如紐とくしる有 如まへ 孔阜

飛鳥〜舟小落む秋の風

推已

敏とあ〜る遊ふも秋の

晋川

門口の通〜きぬ程木枯る

可望

静と〜りけつ雨のや〜きは

岳輅

似ふあ〜ふ衣と人糸ら解て中

椿堂

妻の麻〜ちむつま〜まあふ

士朗

倒さ休井も〜のや〜物〜

孔阜

や〜お月〜色〜毛〜ぬ山里

松見

井戸のあ〜を〜根の僅か〜

青川

雁のあ〜の〜き〜き〜

推已

と月花のほ〜き〜る〜

岳輅

雛の〜ら〜お〜洗〜ふ〜

可望

建〜し〜門〜後〜の〜代〜

朝

翠の〜る〜際〜す〜る〜

室

誰やらう君を呼ぶやうれ鳥の啼
二葉の牛房あまのこころのさけ
み思を斗波の糸へあつて
志くはけくあふよのおもひそめ
あふる。柏の音あふえく
と食ふうせ。松のあけ下
平くは酒をほけりの立所と
堂 輅 望 川 巳 阜

丸太をくちを折る砂川
藤すね自河を半けの感あ
あふの穂あぬりね 陣
新夏の豆屋あふく 賣ふり
暮あをとりあふ信樂のあ
あふりあふくあふりあ
あふりあふくあふりあ
あふりあふくあふりあ
川 兄 阜 朗
己 川 兄 阜 朗

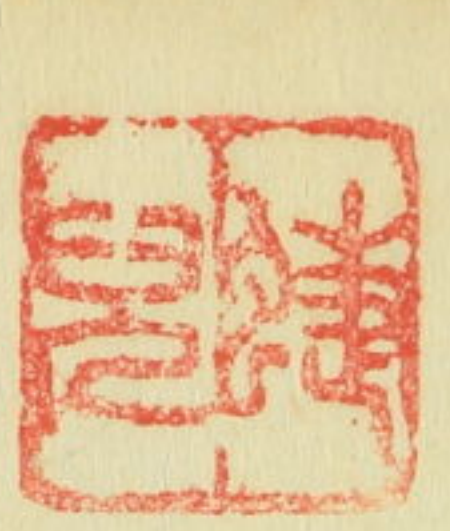
神を祀るに……もの不況を

皆むけよ来るまき押のり

そよのなる泣の東崎の曙了

し……心き……ぬも……後……ふ……む……せし

泉 兄 望 月



此記行ハるま……の白を松見岳轄々橋の懸不
あ……う……記……ある……あり……此……岸……推……己……喜……川……等
……を……ふ……る……川……し……と……り……て……婦……久……通……の……記……を
……必……法……を……記……す

